

サービスイリアの建物から一步外に出た二人の髪が、吹きつける北風に舞い上がる。その風の冷たさに目を細くしながらも、えっちゃんはうれしそうに言ったもんだ。

「せっかくの旅行がいい天気でもよかったわね、里美」

里美ちゃんは、えっちゃんをチラッと横目で見て、「江利子のポジティブシンキングには頭が下がるわ」と応えた。

「晴れてる理由は、素人でも理解できるくらいに典型的な西高東低の冬のせいでしょ。しかも『からっ風』で有名な群馬に向かったのドライブ。冬の旅ってオツよね」

「そうでしょ？」

えっちゃんは澄ました顔で笑う。里美ちゃんとは大学以来の友だちであるえっちゃんにとっては、里美ちゃんの皮肉なんかどうってことないらしいね。

二人は、えっちゃんの車の運転席と助手席にそれぞれ乗り込んだ。動きだした車は、上里サービスイリアをあとしにして、高速道路の本線へと出ていく。

道は、関越自動車道下り線。関越道が全線開通したのは、八〇年代の半ばだったつけねえ。えっちゃんが高校に上がったころだよ、確か。

その関越道を、えっちゃんの運転する軽のスポーツカーは群馬へ向けて走っていく。一〇〇キロ近いスピードで飛ばす自動車の運転に、えっちゃんは真剣だけど、助手席の里美ちゃんは、のんびりと窓の外の景色を楽しんでる。

「ねえ、江利子、すごいよ。向かう先一八〇度が山に見える風景。東京を離れたなあって感じ」

里美ちゃんの言うとおりの、遮音壁のない部分も多いこの道路からは、本当によく景色が見える。ゆるやかなカーブがつづいて、進行方向が変わるたびに、景色も変わる。上州をめざす関越道は、景色も楽しめる面白い道路なんだね。尤も、運転席のえっちゃんは景色どころじゃないみたいだけでも。

「ガイドブックによると、私たちがめざしてる伊香保温泉があるのは榛名山はるなざんっていう山の中腹だそうだけど、榛名山って、どの山



かしらね？」

「さあ？」

二人に教えてあげたいねえ。見えてるのはね、右手のほうから順に、日光と足尾の山々、上州を代表する山・赤城山あかぎやま、それから子持山こもちやま、小野子山おのこやま。遠くに武尊ほたかと谷川も見えるはずだけど、きょうは雪雲に隠れてるね。小野子山の左手前が、今二人が向かっている榛名山。遠くに、真つ白く雪をかぶっている富士山形の山が浅間山あさまやま。さらに左に奇峰みづたか・妙義山みょうぎざん——ここからだこと小さいけどもね。その左には群馬と長野の境の山々があつて、つづいて群馬と埼玉の境の山々だよ。

「そういえば、夢*1二の絵にも、榛名山を描いた絵があつたような……」

と、えつちゃんと言つた。

「竹久夢二たけひさねえ。江利子は昔から夢二が好きよね」

「そうよ。言つたでしょ、今回の旅の最大の目的は、伊香保にある彼の美術館なのよ」

「いいわよ、喜んでつき合うわ。私は温泉とおいしい食事が楽し

*1 竹久夢二

明治17年9月16日岡山県に生まれる。明治44年伊香保に住む少女からのファンレターにより伊香保を知り、その後、大正8年に初めて伊香保榛名の地を訪れる。以来、伊香保の気候・風土・人情に心を寄せ、度々訪問。晩年には「榛名山美術研究所」建設という大きな構想を抱くが、志半ばで病に倒れ、昭和9年信州富士見高原療養所にて永眠。数え51歳。代表作は『黒船屋』『五月之朝』『青山河』など。絵画・挿絵のほか、千代紙・浴衣・書籍の装丁などのデザインや詩、俳句など幅広く活躍。

めればそれで大満足」

「伊香保はお湯もいいわよ」

「そうみたいね。ネットでちよつと評判を見てみたわ。浸かるのが楽しみ！」

夢二の愛した榛名・伊香保の地に、夢二の美術館か……。いいねえ……。

二人は知らないだろうけど、夢二は榛名山に、*2芸術と手仕事による産業の拠点を作りたいと願っていたんだよ。アメリカ西海岸のカーメルから出した手紙には、カーメルのような芸術のまちを榛名山に作りたいたいと書かれてる。

「ところで、江利子。この車ってナビがないけど、インター下りてから道は分かるの？」

「分かるわけじゃないじゃない。里美が地図を見てナビするのよ」

「私？ まあいいけど、間違えても文句言わないでよ」

「言わないわよ」

おしゃべりするうちに車はどんどん進んで、赤城山が右に大き

く、榛名山が左に大きく見えてくる。

「すごいなあ。こうして近くで見ると、山のある景色って雄大だわ。

こんなところに住んでみたいわね」

「転職して引越す？」

「こんな不景気でなけりゃそれもいいわね」

「農家のおよめさんとか」

「無理。じつは案外あこがれはあるんだけど、実際問題としては、

好き勝手に生きてきてこの歳になった私にはもう無理」

「そうよね」

「あ、渋川伊香保インターまであと三キロって表示が出てたわ。

——三キロといえば、江利子のダイエットはどうしたわけ？」

「そんなこと今思い出さないでよ。これから宿でおいしいもの食べようってのに」

「ダメだったの？」

「婚活のつもりで合コンだの飲み会だの、誘われるものに片っ端から参加しまくってたら、逆に一キロ増えたのよ！」

*2 「榛名山美術研究所」構想
夢二が取り組んだ美術活動の一つに「榛名山美術研究所」建設の構想がある。

昭和3、4年頃から着想し、榛名湖畔にその拠点となるアトリエを建て、昭和5年5月には建設趣意書を発表。この計画は「手による産業」を謳った壮大な工芸運動で、自然に学び、身近な材料を用いて日常生活に即した絵画、木工、陶工、染織などの制作をすすめることに、生活の中に芸術や美術を活かすことで人間の本质に迫る試みであった。

当初より大きな反響と、多くの賛同者を得、着実に進行するかに見えたが、翌年の外遊によって中断し、その後、病に倒れた夢二は再びこの地に戻ることはなく、研究所建設の夢はついでにしまっ。

ああ、えっちゃんってば。運転に余裕が出てきておしゃべりを
楽しむのもいいけど、熱くなつてアクセル踏み込んだめだよ。
「理想体重への道のりは遠いわね」

「うるさいわね。そういう里美こそ、友だちに紹介してもらつたつ
ていう例の年下システムエンジニアとは、その後どうしたのよ？」
「二回ごはんいって、映画いって、それっきり。なんかピンとこ
なかつたんだもん」

「ぜいたく言ってるわね」

「もう選べる立場じゃないって言われりやそうなんだけど、でも
私だって選びたいのよお」

「ああっ!？」

「なによ、江利子？」

「話すのに夢中で渋川伊香保のインター過ぎちゃった!」

「え？ あら、ホント。ま、次で下りればいいわ。数え四十歳に
して未だ独身の、女二人の冬の旅。急ぐ必要もないんだもの」

「わざわざ数え四十歳とか独身とかいう修飾語つけるのはやめて」

「現実から目を逸らしちゃダメよ、江利子」

「里美に言われたくないわ」

「……やれやれだね。下りる予定だったインターを過ぎちゃった
かい。」

えっちゃんの運転する車が高い橋にかかると、これまで以上に
強烈なからつ風が吹きつけた。

橋を過ぎるとややきつい上り坂。子持山と小野子山が、近くに、

大きく見える。赤城は右の真横。榛名は後方になった。